

# あいち朝日遺跡ミュージアム 研究紀要



## 第4号

---

北條芳隆	遺構と遺物からみた弥生文化の暦 .....	1
佐藤祐輔・原田幹・川添和暁・福井淳一・河合章行・中山誠二・佐藤由紀男	復元製作した弥生時代鉄器による鹿角加工実験報告2 .....	21
原田幹	朝日遺跡クローズアップ模型(山・森での活動、海での活動)の制作について — あいち朝日遺跡ミュージアム展示制作報告(3) — .....	47
川添和暁・松本彩	朝日遺跡出土骨角器補遺報告(1) .....	55

---

2025年3月

あいち朝日遺跡ミュージアム

# 遺構と遺物からみた弥生文化の暦

北條芳隆\*

## 要旨

古代中国の元嘉暦が古墳時代後期に百済から招来されるより前の日本列島社会は、系統立った暦を知らず自然暦の段階に止まる状態だったと通説は語る。しかし現在の考古天文学的手法によって各地の遺跡や遺構を点検してみれば、弥生時代早期には太陽暦にもとづく日の出暦が導入された可能性が指摘できる。水稻農耕文化体系の一環として移植された暦の枠組みである。人間の時空間認知をふまえつつ現時点の研究成果を概観すれば、こうした理解が妥当である。ただし太陽暦よりも前に独自の太陰暦が編み出された可能性が最近になって浮上してきた。朝日遺跡出土の赤黒円文パレス壺は、日本列島で自生した固有の太陰暦を浮き彫りにする資料として注目される。

## キーワード

方位観念、時空間認知、日の出暦、太陰暦、朝日遺跡の赤黒円文パレス壺

## はじめに

日本列島の歴史のなかでも弥生時代は特別な意味をもつ。灌漑水稻農耕が日本列島の広い範囲に波及し、稲作を基幹的な食料生産とする社会の成立だったからである。それ以降は経済から社会の価値観に至るまで、稲米を現物貨幣に据える水稻農耕社会へと向かった。稲米は国家の枠組みを支え、稲米建ての経済構造も江戸時代までは維持された。

じつは暦の歴史も弥生時代が転換点であった可能性が高い。水稻栽培には農事暦が不可欠なので、稲作技術の一環として暦の枠組みも中国大陸から持ち込まれたと考えられる。具体的な手法としては太陽の運行を見据える日の出暦が最有力候補である。

もちろん先行する縄文時代の社会も、相応の暦を編み出していた可能性はある。しかしながら水稻農耕と直結する弥生文化以降の動向とは異なり、いわゆる自然暦の段階に止まった可能性も否定できない。天体運行への認知については、夏至や冬至、あるいは「高い月」の到来を熟知していた形跡は明確である反面、たとえば春分や秋分を見定めていたのか否かを含め不明な点が多い。今後の課題である。

ただし黒潮と対馬海流にはさまれた日本列島の場合、そこに居住した人々は潮汐の変化に敏感にならざるをえない環境下で歴史を

刻んできたという、疑いようもない事実がある。そのような海洋環境のもと成立した諸文化なので、月の満ち欠けを基準とする太陰暦は、縄文文化あるいは後期旧石器文化にまでさかのぼるかもしれない、自生的な暦として成立した可能性を考慮する必要もある。

こうした課題の解明に有効性を発揮するのが考古天文学であり、それに立脚する本稿では、弥生時代以降に明確化する原初的な太陽暦や太陰暦の復元過程を紹介する。とはいえ暦の問題を考えるさいの前提認識として不可欠な要件は、先史・原史時代の人々がどのような方位観を抱いたのかを押さえることである。しかもそれは埋葬頭位や埋葬方位<sup>1)</sup>の分析から導かれる。そのため埋葬に投影された空間認知の問題から議論を始めることをお許しいただきたい。

## 1. 振幅をもつ古相の東西方位

### (1) 藤本英夫の先駆的業績

私たちは東西南北という四方位に馴染んでいる。このうち東西方位を取り上げれば、真東や真西を基準に考えることが通例である。しかし先史・原史社会の人々はそのような方位観を抱いてはいなかった可能性が高い。

日本考古学においてこの問題を的確に明示したのは藤本英夫である。藤本は「太陽が

※東海大学文学部

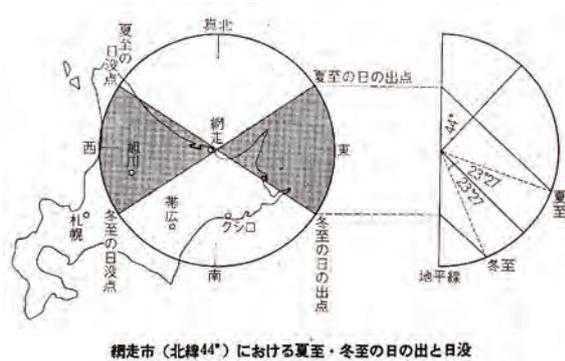


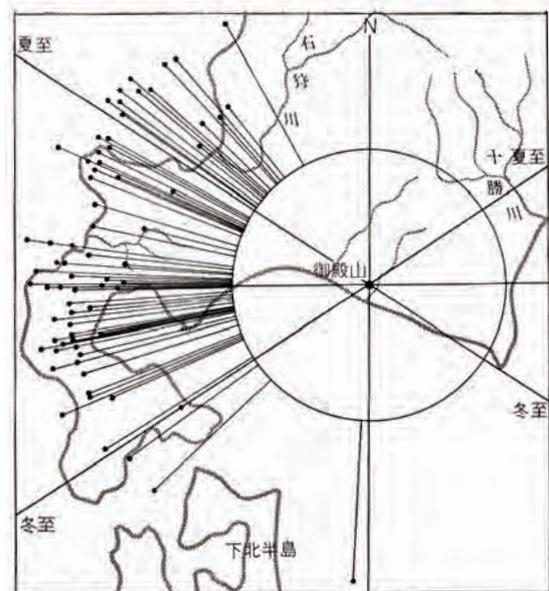
図1 藤本が明示した東西方位の実相  
(藤本 1971 より)

昇る方が東、太陽の落ちる方が西」という一般的な観念の実相を点検し、北海道網走を例にとって、東と西にはそれぞれ振幅があることを力説した。図1はそこからの引用図である(藤本 1971:93頁)。太陽の出没方位には夏至を北限とし冬至を南限とする約70°の扇形に広がる振幅があり、それが東と西にたいする方位観念の実態であった可能性を説いた。引用図の網掛け部分が網走に居住した先史時代の人々が抱く東西観であったとの主張である。この主張を否定する材料はなく、妥当な知見である。

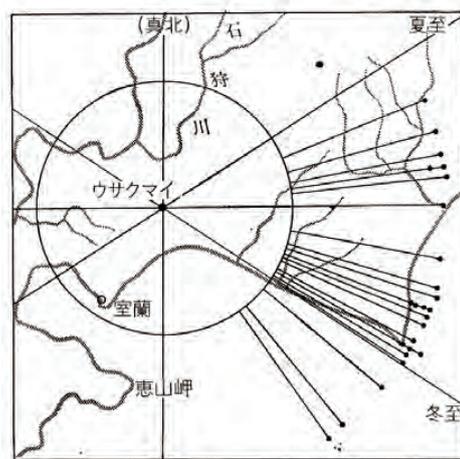
本州地域に引きつけてみても、大和言葉における東の古語は「日向かし」(ヒムカシ)であり、西の古語は「往にし」・「去にし」(イニシ)である。「日向かし」の説明は不要であろうが、「往にし」・「去にし」は「往ぬ」・「去ぬ」と「し」からなり、省略された主語は太陽で、それが没してゆく情景を表す動詞、後者は方角を表す助詞である。つまり「日向かし」も「往にし」・「去にし」(以下「往にし」)も太陽の出没に則した方位観念なのであり、かつ年間の太陽の出没範囲は観測点を中心に扇状を呈する。したがって藤本の理解は本州地域にも妥当する。決して真東や真西を基準に据えるものではなかった。太陽の運行の実態をふまえた古語であり、緯度の高低と周辺の山並によって振幅には若干の差が生じるにすぎない。

上記の前提的な理解にもとづき、藤本は道東の静内御殿山遺跡における縄文時代後・晩期の埋葬74基を対象に、その埋葬頭位は

年間の日没方位を志向する事実を導いた(図2上段)。さらに道央の千歳市ウサクマイA遺跡から発掘された25基の擦文時代の埋葬を対象として、その埋葬頭位は年間の日の出方位に向けられた事実を解明している(図2下段)。アイヌ民族の葬送儀礼にみる、遺骸を東枕に寝かせる習俗の意味に関心を抱いた藤本は、「アイヌの死者の国は、下方の国といって、陽の落ちる西の方にある。それで死んだ人が立ち上がったとき、まっすぐ西の方

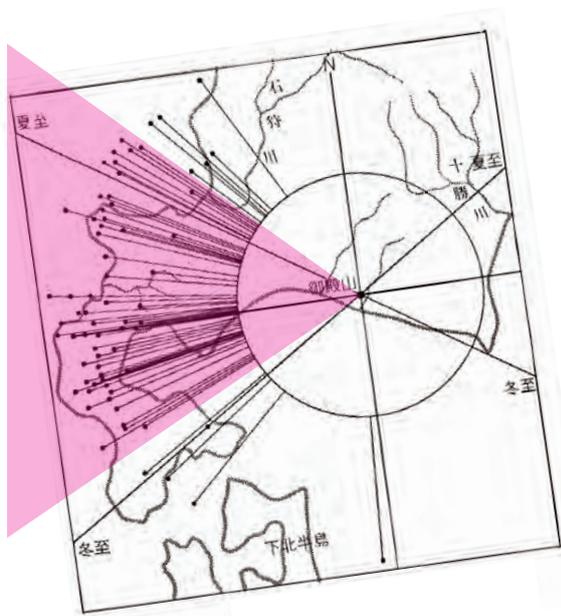


御殿山墳墓群の頭位方向  
74例(北緯42°19')  
(藤本 1971 文献:157頁掲載図より)



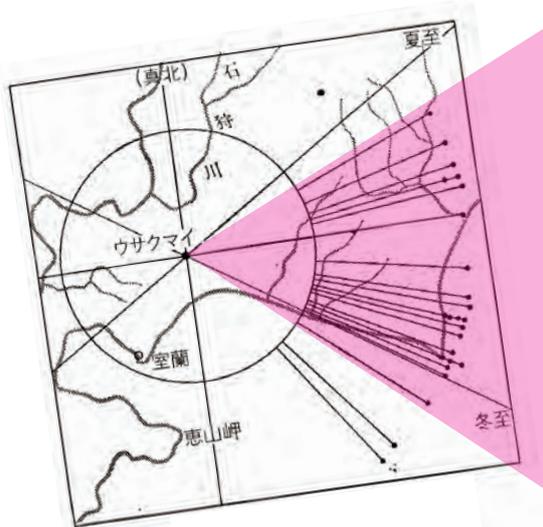
ウサクマイ 墳墓群の頭位方向  
25例(北緯42°50')  
(藤本 1971 文献:182頁掲載図より)

図2 藤本による埋葬頭位分析結果  
(藤本 1971 より)



静内御殿山遺跡の埋葬頭位

(藤本 1971 文献：157 頁掲載図を補正)



ウサクマイ A 遺跡の埋葬頭位

(藤本 1971 文献：182 頁掲載図を補正)

図3 真北への補正作業結果  
(藤本 1971 を改変)

に向いていけるように、顔を上に向け、頭を東にして埋葬する」(藤本 1971：14 頁)とのアイヌの長老から聞き取った内容をふまえ、その起源を考古学の方法をもって追求したのである。真に注目すべき研究成果だといえる。

引用図が示す様相を単純化して理解するならば、縄文文化の人々は埋葬姿勢を屈葬にしつつ死者の枕を日没方位に向けた一方、伸展

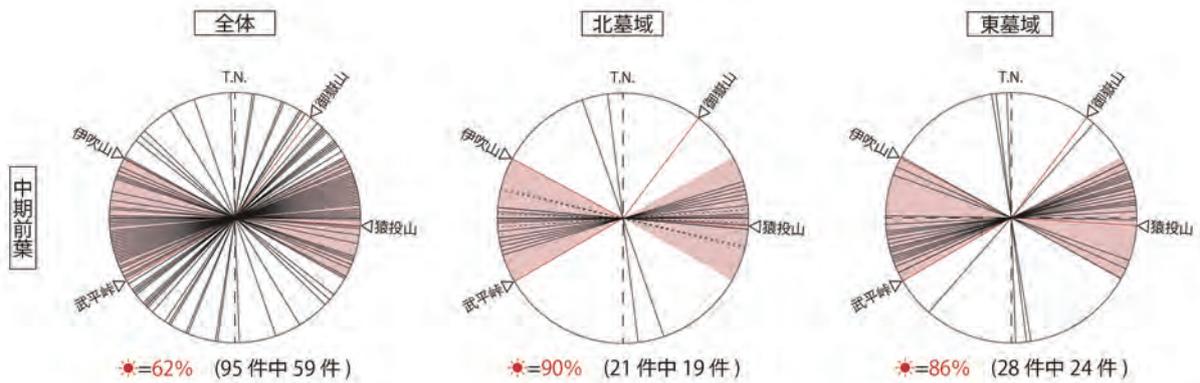
葬を採用した擦文文化の人々は、死者の枕を日昇方位に向けるといった反転関係を示すことになり、後者の習俗がアイヌ文化に引き継がれたという理解が可能である。さらにどちらも年間の太陽の出没範囲に埋葬頭位を沿わせる傾向は明確なので、死者の魂は身体からどのような抜け方をするか、といった捉え方の差にすぎなかった可能性も指摘できる<sup>2)</sup>。

ただし現在の学術水準に照らすと、藤本作成の図には若干の補正が必要である。その理由は地磁気偏角と黄道傾斜角の変動をふまえた真北基準への補正が求められるからである。藤本の著作をみると、埋葬頭位の計測には方位磁石がもちいられ、それで計測した事例をもって「真の東西方位に収斂」(藤本 1971：183 頁)と記載している点からみても、地磁気偏角への配慮はなかった可能性が高い。また紀元後に展開した擦文文化の場合、黄道傾斜角の変動には微細な変化しかないので問題はない反面、対象が紀元前 10 世紀より前の縄文時代後・晩期となると明確な差が生じる<sup>3)</sup>。

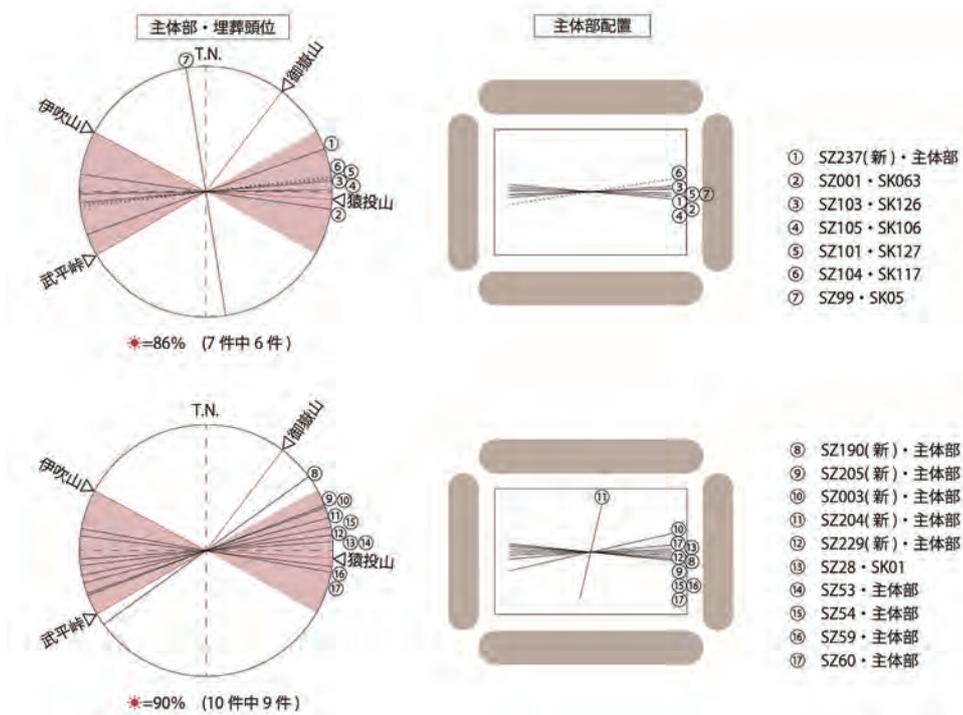
このような問題点を解消させるために、静内御殿山遺跡については発掘調査年代である 1970 年の地磁気偏角を考慮し西へ 8° 傾け真北基準とし、年間の太陽の運行範囲は紀元前 1,500-1,499 年のそれとした。ウサクマイ A 遺跡についても同様の方法に沿って補正をおこなった。その結果を示したものが図 3 である。

こうした補正をかければ一目瞭然、藤本の著作では例外的な扱いとされた事例の多くが同時代における年間の太陽の出没範囲に収まることがわかる。つまり現時点の水準に沿った補正を加えれば、藤本の業績がいかに先駆的かつ卓見であったのかを再確認できる。

もとよりその後の日本考古学では、藤本の業績には厳しい批判が展開され、埋葬頭位それ自体が意味するところの内実は問われず、代わりに被葬者の出自など共同体規制に関わる脈絡に沿って解釈される方向へと転じた。そのため太陽の運行との関係への関心は薄れ、現在の学界情勢としては多様性の名のもとに保留もしくは忘却された感すらある。この点は白川美冬による学史整理に詳しい(白川 2024a)。しかしながら、考古学の立場



(白川 2024b 文献：4 頁掲載図より抜粋)



(白川 2024b 文献：6 頁掲載図より抜粋)

図 4 白川美冬による朝日遺跡の埋葬方位分析結果 (抜粋)

からアイヌの民俗誌と真摯に向き合い、縄文時代と擦文時代の埋葬頭位を図化しつつ具体的に究明した点において、藤本の業績は再評価されるべきである。東西方位観の本源は太陽の運行範囲を基準としたものであり、死生観の拠り所も太陽の運行に沿わせた先史社会のありようを、藤本は見事に検証したのである。

(2) 扇形を呈する「日向かし」と「往にし」

藤本の卓見は北海道地域に限定されるものではなく、本州東海地域の弥生文化にも妥当する。この点を解明したのが赤塚次郎と

白川美冬である (赤塚 2009・白川 2024b)。愛知県清須市と名古屋市にまたがる朝日遺跡の方形周溝墓と埋葬頭位の様相に着眼した両名は、弥生時代中期前半において年間の太陽の運行を基準とする埋葬方位が成立していたことを明示し、その後の変遷過程や揺らぎが生じた局面も見据えたうえで、古墳時代前期にまで引き継がれる東西優位の動向を説いた。

なかでも赤塚説を検証した白川の作業は徹底しており、検出された全方形周溝墓 625 基中、中期前葉 166 基、同中葉 227 基、同

後葉 118 基、後期前半 44 基を対象に各時期の方形周溝墓の長軸方位を図化し、個別周溝墓の長軸と埋葬頭位の平行・直交関係にも検討を加えている。併せてこの遺跡から眺望される御嶽山や猿投山、伊吹山や武平峠など主要な山岳や鞍部の方位を正確にプロットし、対応関係を点検した点も特筆される。

こうした作業の結果、中期前葉に北墓域と東墓域に造営された方形周溝墓の長軸方位は、そのほとんどが年間の太陽の出没範囲に収まる事実や、東墓域に造営された大型方形周溝墓の 10 基中 8 基までが太陽の出没範囲に長軸を揃える点などを明らかにした。白川作成のグラフの一部（白川 2024b：4 頁）を抜粋し図 4 に転載したので確認いただきたい。

この図を先の図 3 と比較すれば明らかのように、藤本が解明した方位観の様相は白川の作業結果とも一致する。だから北海道先史時代の様相は本州東海地域の弥生文化にも妥当するのである。朝日遺跡の弥生人もまた、年間の太陽の運行を基準とする空間認識を抱いていた可能性が高く、「日向かし」と「往にし」は、真東・真西からそれぞれ南北に 30°弱の振幅をもつ扇状に広がる状態として認知したことも確実視される。

さらに朝日遺跡の場合、「日向かし」側の指標となる猿投山と埋葬方位との関係は希薄である反面、「往にし」側の指標となる伊吹山や武平峠と埋葬方位が対応する事例が少数ながら認められる点には注意したい。伊吹山は夏至の日の入り方位、武平峠は冬至の日の入り方位であって、両者は日没の北限と南限の指標でもあった。こうした年間の節目となる日没と、目立つ山並への日の入りが重なる事実は注目される。

弥生時代の人々が抱いた他界観として有力視されるのは山上他界<sup>4)</sup>であるが、朝日遺跡からみた「往にし」は養老山脈一帯であり、その両極が伊吹山と武平峠なので、山上他界と「死者の国は、下方の国といって、陽の落ちる西の方にある」（上掲引用文）といった観念との高度な相関を認めざるをえない。ようするに死者の魂が赴く先は沈む太陽に誘われて養老山脈に向かうとする観念であった可能性が浮上し、その南北両境界が伊吹山と武

平峠だということになる。また伊吹山山頂に夏至の太陽が没する情景が観察できるという事実は、朝日遺跡がこの場所に営まれた背景を問うさいにも重要な知見となる。

ちなみに『日本書紀』での伊吹山は、日本武尊（ヤマトタケル）に瀕死の重傷を負わせた荒神の住処「五十葺山」として登場する。さらに養老山脈の裾野を伝い伊勢の能褒野で死去した日本武尊の魂は白鳥となって西の大和へ、次に河内へと飛翔し、そこに造営された白鳥陵から天に昇ったとも記載されている（「景行天皇四十年条」）。この史料が語る内容と本稿での考察が矛盾なく整合する点にも注目すべきであろう。伊吹山は山中他界のなかでも特別な霊山であったこと、死者の魂は「往にし」に向かうとの観念、たとえ墳墓を造営しそこに遺骸を葬ったとしても死霊は鳥に転生し飛翔してしまうとする観念は、朝日遺跡を営んだ人々の想念に端を発する可能性さえあるからだ。

### (3) 拒絶反応への応答

ところで赤塚や白川の見解については、今述べた筆者の評価と併せ、偶然の一致や意味のない事実をことさら重視する思考にすぎないとの拒絶反応があると聞く。埋葬方位については周辺地形の特性や居住空間との位置関係など、諸要因に規定された可能性を考慮すべきだとの批判であるし、他界観なる不可知の要素に太陽の運行を引きつけることなど論外で、非科学的な発想だと処断する思考でもあろう<sup>5)</sup>。

しかし人間の認知構造を重視する立場からみれば、こうした批判や懐疑は無意味である。たとえば明と暗、光と闇は太陽の運行に規定され、生業活動も日中に限定される場合と夜間に限定される場合とに二分される。朝日が昇る情景は今後への期待を抱かせ、夕日が沈む情景は過去への反省を誘う。天候も陽光が地上に注がれるか否かによって判断され、日当たりの良し悪しは居住環境を規定する大きな要因である。現代社会を生きる私たちにとっても非常に身近な、かつ根源的ともいべき人間の認知を顧みない思考のどこに科学性があるのだろうか。

この問題を時空間の認知構造に引きつけて解説すると、遺跡と周辺景観との関係を探

るうえで最上位に位置づけられる指標は a) 〈北天の周極星や太陽・月の運行〉である。その次が b) 〈火山を含む山岳や海あるいは湖沼〉、さらにその次が c) 〈河川を含む周辺地形および湧水や地下水脈との関係〉となる。季節的に変動する風向きは a) と b) に規定され、居住地の環境は a) ~ c) によって規定される。つまり人間の空間認知はこの序列に沿って定位され、時間の認識も太陽や月の運行に沿って知覚されたし、他界観や神観念の拠り所も同源である場合が多い。こうした認知構造を軽視したのでは生産的な議論とはなりえない。筆者が主張する天体景観を含む景観史とは、こうした脈絡を重視するものであり、古代中国で形成された地相判断すなわち風水思想を学術的に解析するさいにも重視すべき指標となる。

では以上の議論をまとめると、日本列島居住者が抱いた方位観は、縄文文化から弥生文化までを通して年間の太陽や月の運行に沿わせた東西方位を重視するものであり、他界観もそれに応じる形で形成された可能性が高い、ということになる。これを古相の方位観念と呼ぶことにする。

## 2. 外来の北辰信仰と南北方位観

### (1) 北枕の思想と周極星

では次に新相の方位観念へと議論を進める。具体的には南北方位を指すのであるが、どのような経緯のもと日本列島に導入されたのであろうか。この問いについて筆者の恩師でもある都出比呂志は、近畿地方の前期古墳に眠る王者の遺骸が北枕をとるものが多いことに注目し、この現象を「北枕の思想」と呼んだ（都出 1979）。埋葬頭位は死生観とも直結するため、それは儒教思想の影響だと結論づけたのである（都出 1986）。

邪馬台国女王の卑弥呼や台与は三国時代の魏王朝との外交関係を取り結んだこともあり、このタイミングで「北枕の思想」も倭国に導入された可能性が高い。考古天文学的に表現すれば、地球の自転軸の延長線上である「天の北極」を宇宙の中枢とみなし特別重要視するところの北辰信仰が該当する。

前期古墳と呼ばれる 4 世紀代の近畿地方や吉備地方の前方後円墳の竪穴式石槨（室）

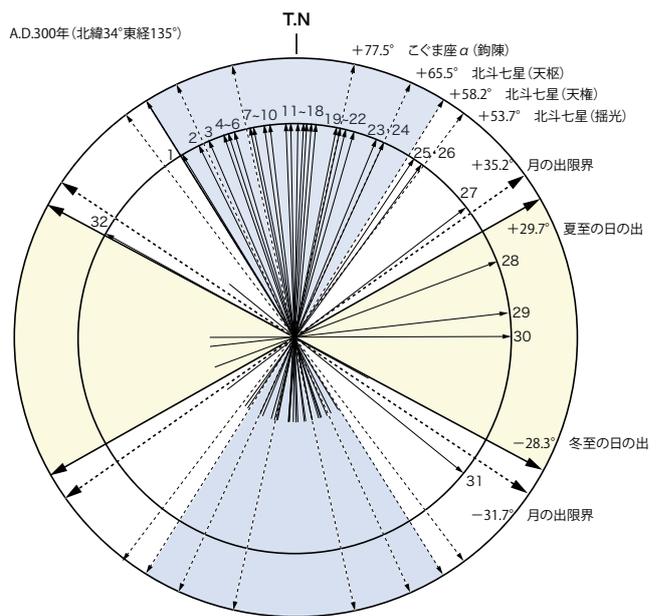


図5 北天の周極星と前期古墳の埋葬頭位（畿内）

の軸線は真北を中心に東西 30° 前後の扇形を呈する状態ではあるものの、たしかに「北枕の思想」を採用したと判断できる。しかしながら固定された真北の目印となる星がこの時代にあったかというところではなく、当時は現在の北極星（鉤陳星）も天の北極から約 12° 離れたところを廻る周極星であった。

そのため再分析をおこなった結果、「北枕の思想」とは、当時の北斗七星の周回範囲（天の北極から 36° の周極軌道内）に収めるものだったことが判明した（図 5）。埋葬頭位ではなく古墳それ自体の軸線も同様で、墳丘主軸と埋葬頭位が平行する前方後円（方）墳の場合、大多数は北辰信仰への帰依を表明したのだといえる（北條 2017）。

先に東西方位は振幅をもつことを述べたが、北方位についても同様で、天の北極を中心に東西への振幅をもち、鉤陳星は夏季には東側を廻る一方、冬季には西側を廻る。北斗七星の場合は天の北極をはさんで鉤陳星と対向関係にあった。こうした周極星が輝く位置を指標とする北方位の導入、それが日本列島における新相の方位観念の成立である。天の北極を観測によって定位するのではなく、周極星の軌道範囲内に収める方法なので「みなし北辰」というべき方位決定であった。

また南については、太陽の南中を基準に

「日向」(ヒナタ)と定めた可能性が高い一方、夜の星空を基準にしたとすれば、南極老人星カノープスの上昇点と消滅点もしくは南十字星が直立する方位をもって定位した可能性もあろう。

とはいえ日本史関連辞書類での定義は「日向かし」に向かって左手の方角を北とし、右手の方角を南とする(下中編 1993 など)。客体的かつ派生的な定義であり、それぞれに振幅をもつことは周極星の軌道を持ち出すまでもなく自明とみるべきかもしれない<sup>6)</sup>。古語も不鮮明で、北の古語は「陰」・「隠」(イン)とされ、南の古語は「日向」(ヒナタ)と辞書的には解説されるが、それがキタとミナミに収斂される道筋は不明であり、東西の語源にみる明快さとは対極にある<sup>7)</sup>。こうした状況からみても南北の方位観は漢字の音と併せて中国側から導入された後出的な概念である可能性が高い。

## (2) 伝統的方位観念の残存

ところで各地の初期前方後円(方)墳には、「北枕の思想」ないし北辰信仰では片づけられない多様性がある。関東地方には古墳の軸線を富士山に向ける前方後円(方)墳があり、夏至や冬至の日の出の向きに軸線を揃えるものも抽出されるからである。こうした事例については、弥生文化あるいは縄文文化にまでさかのぼる、伝統的な火山信仰や日の出・日の入り信仰の具現化だと考えられる(北條 2017)。

古墳時代初頭における富士山信仰の代表格は静岡県富士宮市の丸ヶ谷戸古墳であり、埼玉県行田市の埼玉稲荷山古墳や二子塚古墳もそうである(図6)。九州地方では霧島連山に前方部の軸線に向ける宮崎県宮崎市の生目古墳群1号墳がある。

さらには夏至や冬至といった年間の節目となる期日の日の出に軸線に向けた古墳もある。長野県松本市の弘法山古墳(図7上段左)や愛知県犬山市の東之宮古墳が代表例であり、後者は赤塚が最初に指摘した事例で、白川の検討により再確認された(赤塚 2018・白川 2024b)。また福岡県福岡市の鋤崎古墳は、前方部の延長線上から冬至の日の出を迎えるように意図的に築造され、後円部に設けられた半地下式の初期横穴式石室の入口は前



静岡県富士宮市丸ヶ谷戸古墳  
(富士宮市 1981 報告書: 巻頭写真より)



埼玉県さきたま稲荷山古墳  
(2015年3月25日撮影)



埼玉県さきたま二子山古墳  
(2015年3月25日撮影)

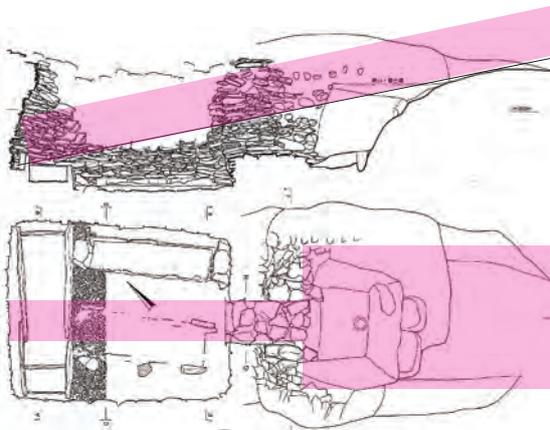
## 図6 富士信仰と関連する古墳

方部に向けられたから、冬至の朝の最初の陽光は、この石室の奥壁までを照らす。地域首長の埋葬祭を冬至の朝に合わせて執りおこなう工夫だといえる(図7上段右と下段)。

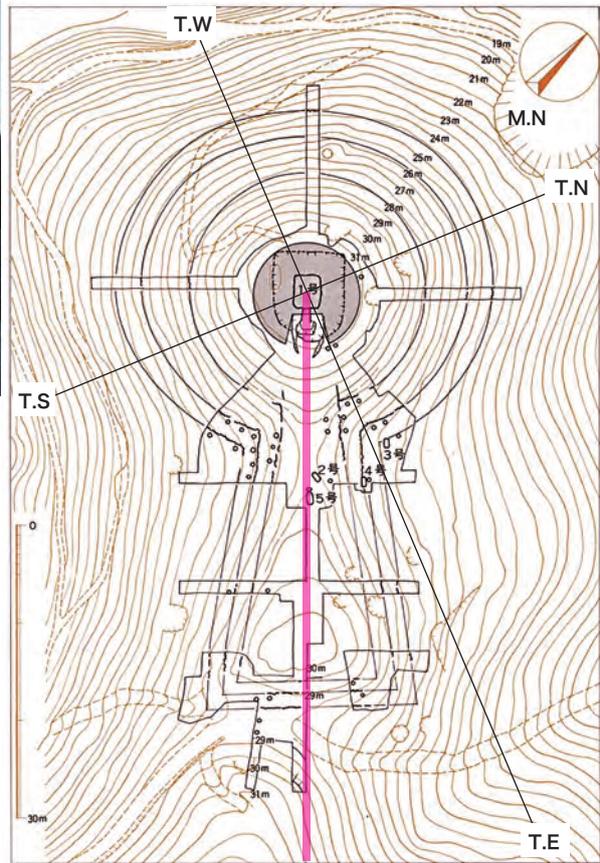
前期前方後円(方)墳の立地については、同時代の水上交通や陸上交通の要所に築かれたとする見解が現在は優勢であり、交易の要所を表示するランドマークとしての機能も



松本市弘法山古墳からみた冬至の朝日  
(関沢聡氏提供：2022年12月24日撮影)



冬至の朝の最初の陽光が差し込む範囲（鋤崎古墳）  
(福岡市報告1981原図を一部加工)



福岡市鋤崎古墳と冬至の日の出方位  
(福岡市報告1981原図を一部加工)

図7 冬至の日の出方位に軸線を向ける古墳

あったと説かれている。今回例示した事例についても、こうした側面からの理解はもちろん可能である。ただし墳丘の軸線や埋葬頭位を新相の方位観念ではなく、古相の方位観念に依拠する事例も散見されることを確認しておきたい。

なお新相の方位観念が厳密性を伴って日本列島に定着し始めるのは7世紀の飛鳥諸宮および古代寺院以降である。この段階になると祭祀関連建造物や古代寺院の伽藍の軸線をみなし北辰ではなく天の北極に近づける志向性が明確となり、表圭法にもとづく真北観測が伴ったことも確実視される。ただし3世紀代の初期前方後方墳である奈良県桜井市の纏向メクリ1号墳は、正確な正方位北に墳丘軸線に向ける希有な事例であり、日本列島における天の北極を観測した初現例として評価される(北條2022a)。

以上、方位に関わる前提認識を紹介した。新相と古相に仕分けられる方位観念であるが、暦の問題と直結するのは前者、つまり太陽と月の運行である。古代中国を含む世界各地では、北天の周極星や昴(プレアデス星団)、シリウスなどの恒星も暦の指標であったことが知られている。しかし遺構や遺物からの点検は至難のわざであるため本稿では前者に限定する。さらに生業との関わりで暦の問題を押さえやすいのは弥生文化以降である。したがって以下、弥生文化の暦はどのように復元されるのかを論じることとし、後段では縄文文化からの影響にも言及したい。

### 3. 弥生時代に導入された日の出暦

#### (1) 二至と二分を重視した水稻農耕文化

初期の水稻農耕文化体系は、中国大陸の長江流域から山東半島、朝鮮半島南部を経て

表1 中国山東省の6世紀水稻作期と日本列島近世の水稻作期

地域	年代	品種	浸種・播種	田植え	刈取り	典拠	出典
中国山東省	6世紀	記載なし	三月を上時、四月上旬は中時、 月中旬は下時（4月～5月）		霜降（10月下旬）	『齊民要術』（6世紀北魏）	西山 1949 文獻
			冬至後百十日後種稻（3月末）	三月に種を蒔く、五月に別種、夏 至後二十日を過ぎれば不可（4月 ～7月上旬）		『齊民要術』（7世紀北魏）	農業出版社 1961 文獻
佐賀藩・諫 早地方	1843以前	早・中	春彼岸に浸種、三十日後に播げ 七・八日後苗代に蒔（4月末）	春土用過より四拾日後に植える（6 月初旬）	秋彼岸より二十日過ぎて、刈初 （10月10日以後）	『種籾』（天保14年写、1843）	嵐 1975 文獻
	1843以前	晩	春彼岸に浸種、三十日後に播げ 七・八日後苗代に蒔（4月末）	六月土用二十数日前（6月25日頃）	秋土用過ぎて二十日で蒔（10 月下旬）	『種籾』（天保14年写、1844）	
対馬・佐須	1722以前	記載なし	彼岸終りに浸種、二拾日余に春 日干して蒔く（4月中旬）	夏至の前後拾日間（6月中下旬）		『老農類語』1722	
対馬・豊崎 三村	1722以前	記載なし	春土用の中過ぎ（4月下旬）	上田は梅雨中頃（6月下旬）、中下 田は梅雨初（6月中旬）	九月節の初頃（10月上旬）	『老農類語』1722	
対馬・伊奈 二村	1722以前	記載なし	八十八夜頃（5月初旬）	半夏生の数日前より植始（6月下 旬）	秋土用中頃（10月下旬）	『老農類語』1722	
肥後全般	1821～43	早稲	二月播種（3月）	四月下旬（5月）	八月	『肥後国耕作問書』1821・22・43	
		赤物（太唐米）	三月上旬（4月）			『肥後国耕作問書』1821・22・43	
		中稲	三月上旬（4月）	四月下旬	八月から九月下旬まで	『肥後国耕作問書』1821・22・43	
		晩稲	三月上旬（4月）	四月下旬	十月十五日まで（11月下旬）	『肥後国耕作問書』1821・22・43	
南予（斐風）	17世紀	早稲	二月彼岸「二月」（3月下旬）	四月初から二十日「四月」	六月末から七月初「七月」	『清良記』*「」内は「四季作物種子取事」17世紀	
		中稲	三月初「三月」	四月末「四月・五月」	八月末「八月・九月」	『清良記』*「」内は「四季作物種子取事」17世紀	
		晩稲	三月中「三月」	五月中節前「五月」	九月初「九月」	『清良記』*「」内は「四季作物種子取事」17世紀	
		野稲	三月初「三月」	直播一四月	記載なし「九月」	『清良記』*「」内は「四季作物種子取事」18世紀	
安芸藩（広 島）加茂郡	19世紀か	早稲	二月中から三月節入	五月節入から夏至	八月彼岸前後（9月下旬）	安政年間『國郡志』19世紀	
		中稲	三月節入より数日過より三月中	五月中から半夏（6月下旬～7月 初旬）	九月節入から秋土用（10月 上中旬）	安政年間『國郡志』19世紀	
		晩稲	三月土用半ば過より四月節入	五月中過より六月節（6月上旬～ 7月上旬）	九月土用入から霜月節入（10 月下旬～11月上旬）	安政年間『國郡志』19世紀	
河内中部 （八尾）	1842以前	早・中・晩共通	二月彼岸節前浸、春土用播種	五月一日田植え		『家業伝』1842	

北部九州地域に導入された。それは小規模灌漑水田を基軸とする稲の栽培法で、播種から収穫に至るまで集約的な労働投下と入念な管理が不可欠であった。さらに日照時間と降雨量の季節変化に応じる水稻栽培なので、適切な作期の指標が求められたはずである。それゆえ水稻農事暦も中国側から日本列島に移植された可能性が高い。

その内実を点検するために、古代から近世に至るまでの各地の水稻農事暦を抜粋したものが表1である（北條 2024b）。この表をみれば、苗代の田打ちや種籾の浸種が春彼岸（春分を中日とする前後7日間）を開始期とする事例、もしくは旧暦2月（新暦の3月）を目安とする事例が多いことがわかる。したがって原初的な手法であっても、春分を求めることは必須であったと推定できる。夏至は田植え期に該当する。一方の秋分については、早稲の刈取り期の指標であったことがわかる。しかし初期水稻農耕の主体であった可能性の高い晩稲の刈取り期は霜降であり、秋分から1ヶ月後となる。したがって春分から霜降までを農繁期とする7ヶ月間の“栽培予定表”が基本であったとみてよい。したがってこの間の時間経過の仕切りはどのような手法によって組み立てられたのかを解明すること

が分析課題となる。

なお古代中国では、遅くとも周代からは本格的な天体観測法が編み出されたという（藪内 1949）。彼の地では平坦な地表面に柱を垂直に立て同心円を描き、影の方位を測る表圭法が考案されつつあったらしい。しかし日本列島には、より原初的で把握しやすい太陽の出没時の情景にもとづく「日の出暦」ないし「地平線暦」が伝えられたと推測するのが妥当であろう。したがって、ここでは主要な遺跡・遺構からみた日の出の情景を再現しつつ、弥生文化が採用した暦を復元する。

## (2) 日の出暦の仕組み

太陽の運行を定点観察し続ければ、日の出や日の入りの場所は日々移動してゆくことがわかる。最も南寄りから日が昇る冬至の場合、真昼の太陽の高度は低く日没も早く、太陽は最も南寄りに沈む。反対に最も北寄りから日が昇る夏至の場合、昼間の太陽の高度は高く日没は遅くなり、最も北寄りに太陽は沈む。こうした現象への認知にもとづく方位観が「日向かし」と「往にし」なのであり、日の出の移動とその回帰性を利用し季節の移ろいを把握する方法が日の出暦である。日の入り暦も基本は同じである。そのさい幾日かを束ねて節目とする。それが太陽暦の初歩的な

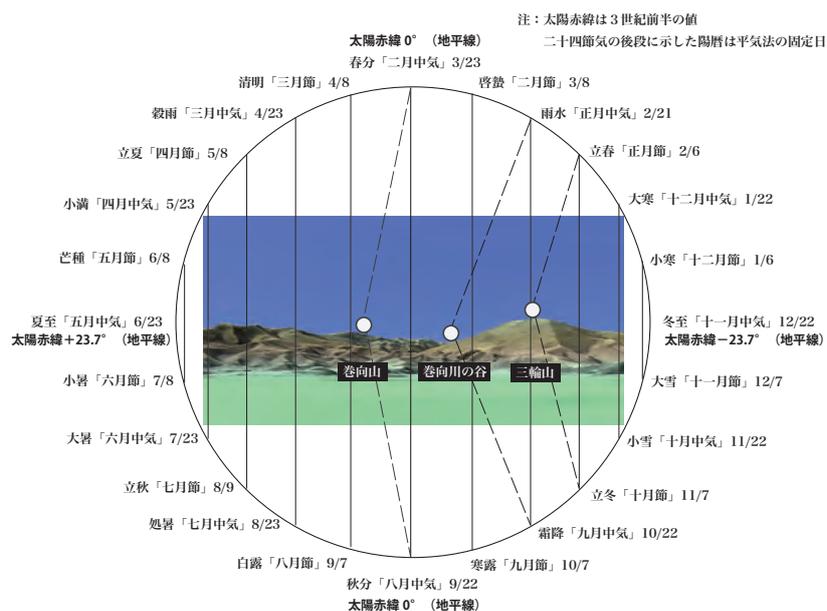


図8 日の出暦の基本原則（奈良県纏向遺跡）

認知法であり、月の満ち欠けを利用する太陰暦とは別建てで発生した時間の把握と管理法なのである。

古代中国でも後期新石器時代の陶寺遺跡では日の出暦がもちいられた。紀元前20世紀のことである（後藤2017）。そのち殷代から周代にかけては太陰暦との調整が図られるようになり、戦国時代までには太陰太陽暦（旧暦）の大枠が完成したといわれる（藪内1969）。その一方、日本列島では稲作技術の一環として、紀元前8世紀の弥生時代早期には日の出暦の手法が大陸側から持ち込まれた可能性が高い。

では日の出暦の方法と具体例を図8によって解説する。この図は奈良県桜井市纏向遺跡の辻地区大型建物Dから3世紀前半代に観察されたはずの、秋から翌年春までの日の出の情景を示したものである。この時代には古代中国で開発された、前年の冬至から翌年の冬至までを24等分して季節の区切りとする二十四節気（平気法）<sup>8)</sup>がもちいられた可能性が高いので、図の外周に配した。

日の出の場所は前景となる日向かし側の山並を目安とするもので、立春と立冬は三輪山山頂からの日の出の情景として、雨水と霜降は巻向川の谷からのそれ、春分と秋分は巻向山山頂付近の九合目からのそれとして記憶

すればよい。

ここで重要なのは、春と秋の節目となる期日の日の出の情景が折り返しで一致する点である。この現象を専門用語では「太陽赤緯の一致」と呼ぶ。たとえば立春を定めれば立冬は自動的に決まり、春分を定めれば秋分も自動的に定まる。なお日の出の北限である夏至の場合、夏至点通過日を中日とする前後3日間（合計7日間）は見かけ上の日の出の場所が移動しない。冬至の場合も冬至点通過日を中日とする前後4日間（合計9日間）は見かけ上の日の出の場所が

0.1°前後で推移するため、停止しているように知覚される。だから夏至と冬至は非常に古い時代から認知されやすかった反面、冬至側を例にとれば、大雪―冬至―小寒まで間の日の出の移動はわずかであるため、前景を目安とすることは難しい。それゆえ冬至点通過日から次の区切りまでの経過日数を数える必要がある。以上が日の出暦の基本原則である。

### (3) 日の出暦と人為景観化

なおこの図から指摘できる景観史上の問題にも言及したい。それは目安となりやすい峰や谷間からの日の出が、節目となる暦日と重なる事実とその意味である。こうした現象は偶然の産物などではなく、そのような情景となる観測点が探し求められた結果、その場所を選んで大型建物Dは建てられたことを意味している。さらに重要なのは三輪山との関係で、大型建物Dで観測される三輪山山頂からの日の出は、年始の到来を告げる特別な「ご来光」だった可能性がある。

同時代の中国側の暦法では正月の指標を立春におく夏至<sup>9)</sup>が基本であったし、後述するように倭国内にもその影響は及んでいた。同時代における太陰太陽暦の暦日設定は、大寒から雨水までの間に新月（朔）が到来するタイミングを見計らって正月元旦とするものだったので、年始の指標である正月節すなわ

ち立春の日の出が重視された蓋然性は高い。そしてこの情景は、三輪山自体に付加価値を与えるものでもあった。

朝日遺跡からみた夏至の日入りが伊吹山と重なる事実についても同様で、太陽の運行を測る目安としての前景に、宗教的な意味が添えられる過程の一端を垣間見ることができる。つまり日の出暦は、ときに周辺の山並を人為景観化する作用を果たすこともあり、三輪山や伊吹山がのちに神聖視されるに至る背景には、こうした消息があったことを物語っている。

#### 4. 日の出暦の導入と東遷

##### (1) 弥生早・前期の板付遺跡

弥生時代早期から前期までの日の出暦は福岡県福岡市板付遺跡で実践され、精度の向上が図られたと考えられる。その様相を示したものが図9である。上段は早期段階の日の出暦を北台地の建物群から再現したもので、夏至の日の出は米ノ山 594m ピークから、冬至の日の出は大城山 410m ピークの南斜面八合目付近からとなる。さらに双方の中間点からの日の出をみなし春分・秋分（以下◇を付す）とした場合、天文学的な意味での春分と秋分（併せて二分）からは前後3日の

ズレが生じる。

ところが中央台地に築かれた前期環濠の中心からの日の出暦を再現してみると、注目すべき現象が現れる。夏至と冬至の日の出の中間点は、天文学的な意味での二分の日の出の場所と一致するのである。この場所からだと夏至と冬至の日の出時の太陽の高度差は $0.2^\circ$ しかなく、その結果、両者の中間点からの日の出は二分と正確に一致することになった。ようするに早期から前期にかけて、観測場所を南側へ240m移動させたことにより、日の出暦に精度の向上が図られたと考えられるのである（北條 2024b）。

##### (2) 弥生中期の唐古・鍵遺跡

板付遺跡で確立された模範的な日の出暦は、弥生中期までには奈良盆地にも転写された。それが図10に示す奈良県田原本町唐古・鍵遺跡からみた日の出暦である。ここでは夏至の日の出の指標として高橋山 640m ピークが、冬至の日の出の指標としては三輪山 465m ピークが選定され、二分の日の出の指標には龍王山の北尾根、520m ピークが選ばれた。

中期前葉（前300年頃）に建てられた独立棟持柱建物（藤田 2012）として知られる古相の大型建物からみた日の出暦の様相を図

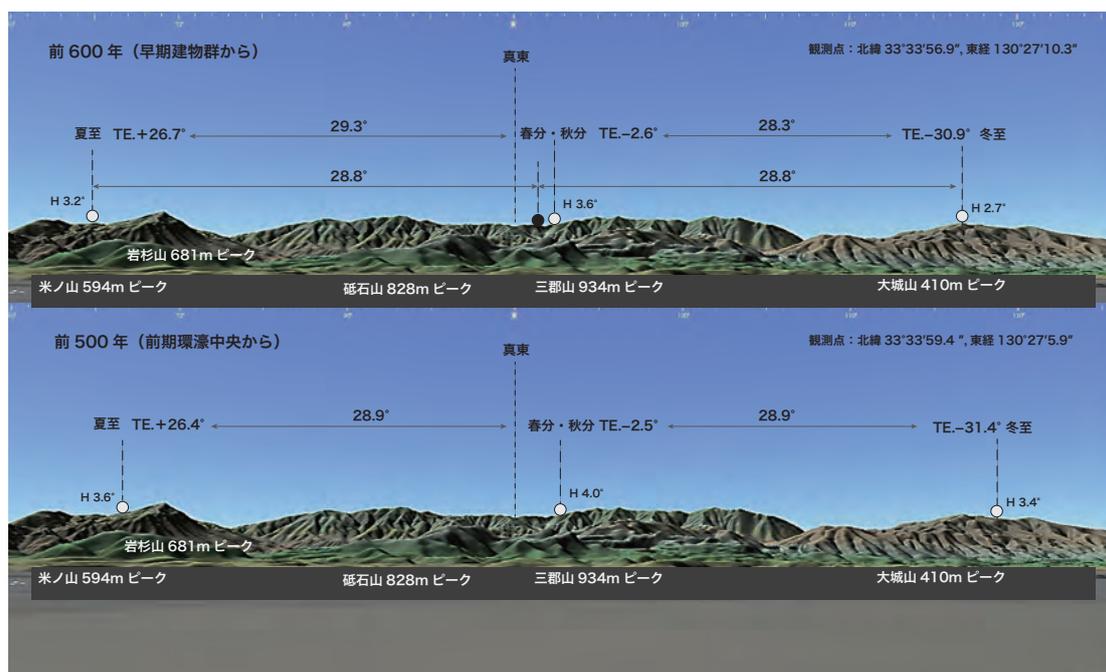


図9 板付遺跡からみた年間の日の出（前600年と前500年）



(写真は筆者撮影)

図10 唐古・鍵遺跡からみた年間の日の出（前300年と前50年）

の上段に示した。龍王山520mピークからの日の出が天文学的な意味での二分の日の出（図中の○）となり、夏至と冬至の日の出の中間点からの日の出として〈二分〉（図中の●）を定めたとしても前後1日の誤差しかない。さらに中期後半（前50年頃）の勾

玉埋納穴からの日の出暦をみると、夏至と冬至の両日の出の中間地点は天文学的な意味でも空間的な意味においても正確な二分となる（図10下段）。こうした様相からみて、この遺跡には板付遺跡で完成した模範的な日の出暦が正しく転写された可能性が高いと判断できる。遺跡の立地場所の選定にあたっては、日の出暦は重要な要素だったと推察され、こうした志向性は大和の弥生文化が独自に開発したものとは考えられない。水稻農耕文化体系の一環として、北部九州から移植された要素だといえる（北條2024a・b）。

### (3) 平原農事暦

紀元後の3世紀前半には北部九州の伊都国王墓、福岡県糸島市に所在する平原1号墓が築かれた。この方形周溝墓の軸線は東南東に向き、延長線上には日向峠を望む。墳丘内の割竹形木棺墓に寝か

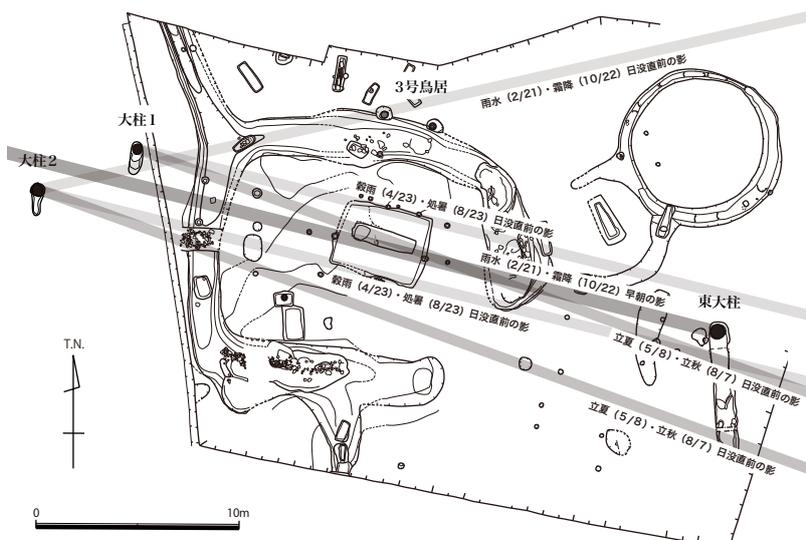


図11 平原1号墓と二十四節気の日出・日の入り

された王の遺骸の足下側も日向峠を向き、木棺墓から東南東に14m隔てた地点には大きな柱（東大柱）が立てられた。日向峠からの朝の最初の陽光が東大柱を照らし、割竹形木棺墓の墓壇の中央に朝の最初の影が伸びる期日を計算すると、ユリウス暦表記で2月21日と10月22日となる。この時代の中国側の暦法の基本計算に当ては

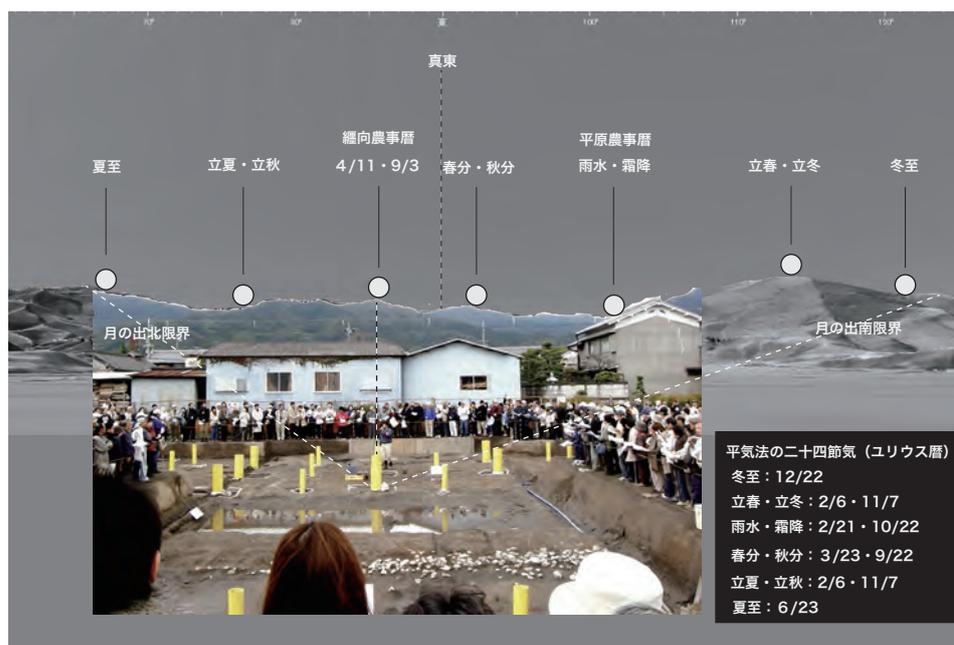


図12 纏向大型建物Dからみた年間の日の出暦

めれば、二十四節気（平気法）の雨水と霜降の両日に該当する。のちの伊勢神宮で開催される祈年祭と神嘗祭の日取りなので、平原1号墓は、水稻農耕に関わる春秋一對の重要な祭礼日を埋葬の軸線に刻むものであったと考えられる（図11）。このような分析の結果導かれた雨水と霜降の両日を平原農事暦と呼ぶ（北條2017）。

なお『魏志倭人伝』中には『魏略』を引いて、倭人は正確な暦を知らないと記された箇所がある。ただし「計春耕秋収為紀年」とも記されている点が注目される。「計」の文字が使われている以上、なんらかの技術的な背景があった可能性が暦学の研究者によって指摘されてきた（細井2014）。その正体が平原農事暦なのであり、中国側の使節は常に伊都国内に滞在したとも記されているので、彼らはじっさいに平原1号墓と東大柱を目にし、双方を貫く朝の影の情景にもとづき「計春耕秋収為紀年」の情報を本国にもたらしたのだと推測できる。倭人が当時の暦法を承知していたことは知らずに、である<sup>10)</sup>。

#### (4) 奈良県纏向遺跡への東遷

この平原農事暦は伊都国内だけに留まらず、奈良盆地でも再現された。それが纏向遺跡の辻地区大型建物Dからみた日の出暦である（図12）。庄内3式期に立てられたこの

建物は正面を弓月岳409mピークに向ける。本建物の中心に立ち弓月岳からの日の出（太陽の下端が稜線に接するタイミング）を迎える期日は、ユリウス暦表記で4月12日と9月3日の両日となる。現在の伊勢神宮の祭礼に照らすと、前者は「神田下種祭」、後者は「抜穂祭」の催行日に当たるので「纏向農事暦」と仮称することもできるだろう。ただし両日は二十四節気から外れ、直近の春の清明（4月8日）や秋の白露（9月7日）からも4日間離れている。

その反面、本建物の中央からみた三輪山山頂からの日の出を迎えるのは2月6日と11月7日、二十四節気の立春と立冬である。さらに巻向川の谷間からの日の出は2月22日と10月20日で、日の出の定義を平原1号墓と同様に、太陽の上端が山の稜線から顔を出す瞬間に変更すれば、2月21日と10月22日となる。すなわち平原農事暦なのである。

つまりこの大型建物Dからも、平原1号墓と非常に良く似た日の出の情景のもとで年間の節目は認知されたことがわかる。この酷似が偶然の一致とはみなせない。平原1号墓の方が大型建物Dより古くに作られたことや、日の出暦の指標となる山並の情景がここまで近似することから判断すれば、古墳時

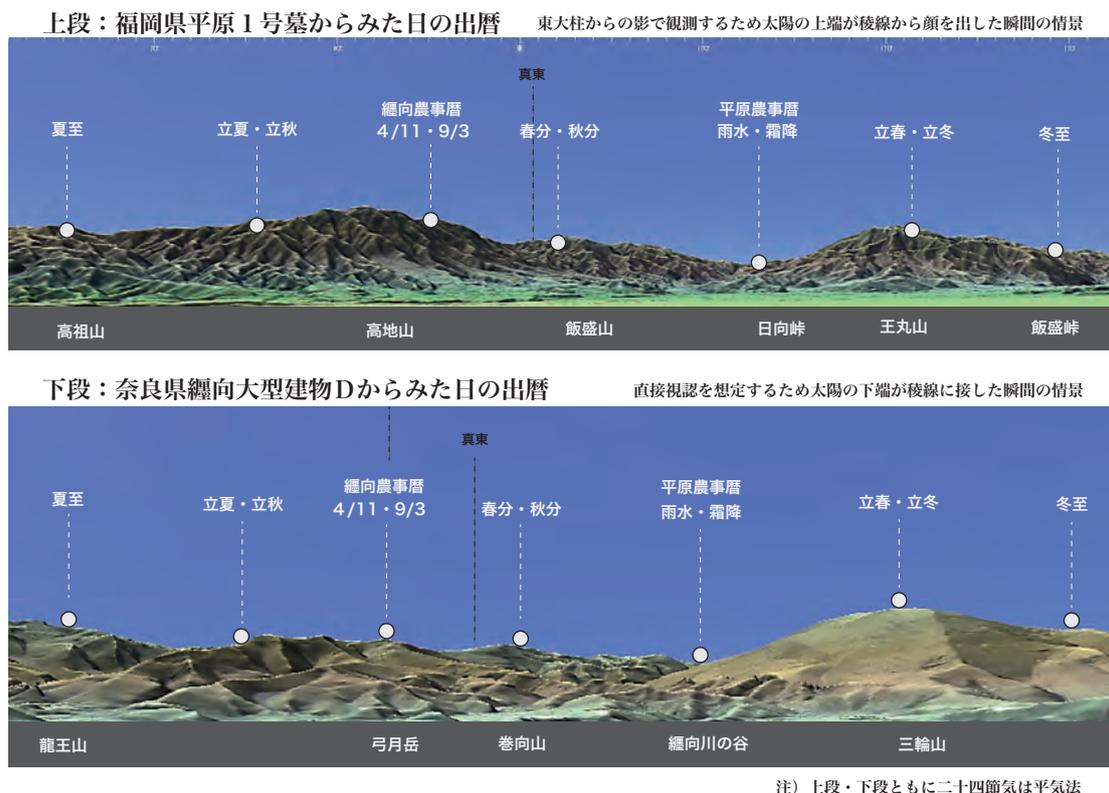


図13 平原1号墓と纏向大型建物Dから観測された日の出暦

代成立期の奈良盆地東南部には、北部九州地域から暦の体系が移設されたと考えるのが自然である。平原1号墓の造営に関わった「日知り=聖」が直接奈良盆地を訪れ、日の出暦を移設した可能性が濃厚である。図13の上段と下段を比較してみれば明らかなように、このとき三輪山は故地の王丸山に擬され、纏向川の谷は日向峠に擬された。同様に龍王山は高祖山に擬され夏至の日の出の指標となった。

こうした事実関係は重要で、たとえば記紀神話にある神武東遷は、日向からではなく伊都国からであったと考えるべきことを物語っている。

### (5) 暦と月信仰

平原農事暦に戻すと、二十四節気（平気法）の雨水や霜降の日の出と墳墓の中心軸線が一致する事実は、同時代の中国・後漢王朝で使用されていた系統的な太陰・太陽暦からの部分的な借用がこの地でおこなわれたことを示してい

る。外交の玄関口でもあった伊都国なので、楽浪郡や帯方郡からもたらされる暦の情報に北部九州の倭人たちは接していたのであろう。

背振山脈を南に越えた佐賀県吉野ヶ里町の吉野ヶ里遺跡でも、平原農事暦は使用されていた。南北両内郭の物見櫓建物には、その軸線が平原農事暦の当該日の日の出や日の入りに向くものが存在するからである（北條・岩城・白川・鴨下2022）。このほか同時代

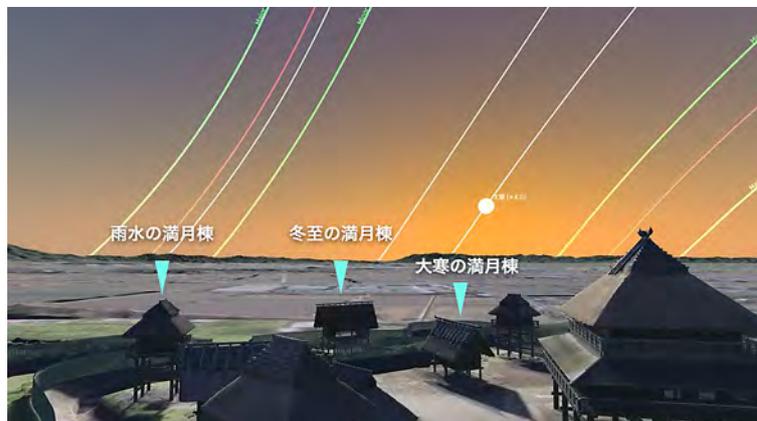


図14 吉野ヶ里遺跡北内郭における満月観測棟

の二十四節気の基本計算法に則した暦日の日の出と軸線が一致する建物も南内郭や北内郭下層には複数存在するので、古代中国側の暦の知識はこの遺跡にも部分的であれ入っていたことが確認できる（北條 2022b）。

ただし北内郭では「高い月」の年末年初の3回にわたる満月の出現方位にそれぞれの軸線を揃えた建物があり、北内郭自体の軸線は216年と235年の冬至付近の満月の出に沿わせている。「高い月」とは月の出没範囲が太陽のそれより広くなる期間を指し、極大期は18.6年周期でめぐってくる。反対に「低い月」とは月の出没範囲が太陽のそれより狭まる期間を指し、「高い月」の極大期から「低い月」の極小期に至るまでの間隔は9.3年である。こうした月の運行への知識がなければ北内郭の軸線は定まらない。そのためこの遺跡では、太陰太陽暦からの一部借用とは別に、「高い月」の満月を重要視する価値観も強く作動したとみるべきである（図14）。

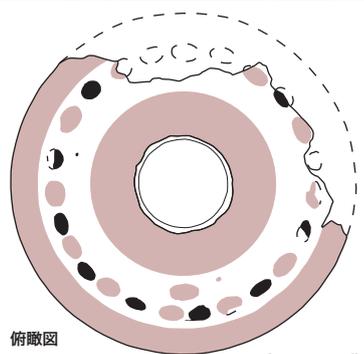
文明段階に至って久しい同時代の中国側では、満月を遙拝する施設などは知られていない。その一方、日本列島では顕著であり、満月に生命力の源泉をみて遙拝する「月の若水信仰」は縄文時代中期に盛行したと説かれ、土偶祭祀とも関わる固有の月信仰が支配的であったともいわれる（N. ナウマン 2005・大島 2014）。さらにこの問題に関連して青森県青森市の三内丸山遺跡では、「高い月」の冬至付近の満月の出現方位に祭祀用の建物6棟が向けられたことも判明している（北條 2020）。

こうした近年の研究動向をふまえると、吉野ヶ里遺跡北内郭の様相は、縄文時代にまでさかのぼる「月の若水信仰」と関連する可能性があり、月の運行にみる法則性を熟知していた形跡も明確である以上、吉野ヶ里遺跡の人々も太陰暦を併用した可能性は高いとみるべきである。

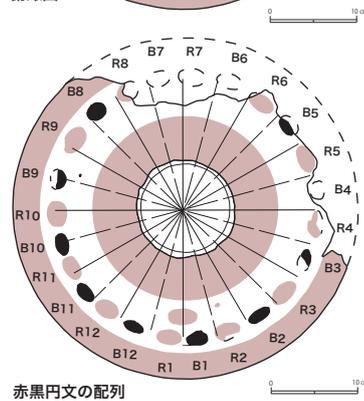
## 5. 固有の太陰暦がもちいられた形跡

### (1) 朝日遺跡出土赤黒円文パレス壺

じつは上記の問題と深く関連する重要資料が存在する。それが朝日遺跡から出土した赤黒円文パレス壺である。本例の重要性に気づいた白川は、先に言及した論文で出土場



俯瞰図



赤黒円文の配列

図15 赤黒円文パレス壺の概要

所の特殊性や土器編年上の位置づけを紹介している（白川 2024b：8-9頁）。図15には写真と俯瞰図および円文の割り付け状態を示した。本例は弥生時代後期のいわゆるパレス式土器群に属する大型壺で、胴部上半に赤彩円文と黒彩円文が交互に配され全周する特殊な施文があり、欠損部分を補えば赤円文12個、黒円文12個で構成されていた可能性が高く、合計24個の配列となる赤黒円文列の上方面にも1個の赤彩円文が配されている。

赤円（光）と黒円（闇）が交互に配置され、上段の赤円（光）が指標であった可能性が高い点をふまえると、たとえば12日間の昼と夜の情景などではなく、年間の太陽や月の運行を表現するものであった可能性が高い。そこで上段の1個の赤円文を日の出の南限である冬至の太陽（後述）と仮定したうえで下

段の24個の赤黒円文の配列を読み解けば、太陽暦の二十四節気は候補から除外され、赤円文を満月、黒円文を新月とする12朔望月すなわち1年間を月の満ち欠けによって計る太陰暦が最有力候補となる。

二十四節気が候補から外れる理由はa)下段の円文列は均等な割り付けではなく赤円文と黒円文の数を合わせた状態であること、b)上段の赤円文は下段の赤円文と黒円文のちょうど中間に描かれ、上段の指標との対応関係が整合的ではないことである。その一方b)の様相は、冬至が満月の場合もあれば新月の場合もあることを示すものだと解釈するなら、この間が年末・年初の調整期間であったことを示唆するものとして読み解ける。

真の冬至である冬至点通過日を中日とする9日間、現在のグレゴリオ暦で表記すれば12月18日から26日までは、見かけ上の日の出の場所は南限に達したままほとんど移動しない。この9日間の月相の変化を見据え、満月や新月、上弦の月や下弦の月など区切りのよい月相の到来を待ってその年の瀬とし、翌日から次の年初とするような仕組みだった可能性が指摘できる。つまり9日間ある冬至の太陽とは、12朔望月である354日余と1太陽年である365日余の間の約11日間の差を埋める役割を果たしたのではなかろうか。このような仕組みなら、太陽暦との誤差はなくなり長期安定的な暦となる。

## (2) 八日市地方遺跡の鹿絵壺

上記の解釈が妥当であることを傍証する資料もある。それが石川県小松市の八日市地方遺跡から出土した鹿絵壺である(福海2003・下濱2016)。実測図を報告書から転載し、俯瞰図と合わせ図16に示した。胴部最上段に描かれた半月円文を冬至の太陽と仮定すれば、12頭の鹿は12朔望月を表すものとなり、1人の人間は春分前後に水田に立つ状態だと復元できる。さらに人間の足下を里の空間とみなし、それより上方に描かれる鹿は山間部に生息する状態だと仮定したうえで鹿の生態的特徴や水稻農耕との対応関係を点検すれば、朝日遺跡の赤黒円文パレス壺から推定された太陰暦との相関関係が明らかとなる。

図17がそれで、最上段に配した円文は朝

日遺跡例における下段の円文列を当て、冬至点通過日が満月であった年の12回の満月の到来日を参考として示した。その直下には八日市地方遺跡例の口縁部内面に刻まれた管状刺突文の位置と数を示し、胴部の鹿絵については図16に示したとおり半月円文の直下の鹿を起点に鹿12までの番号を振った。図の下段には鹿の生態と表1で示した稲作農事暦の概要と鹿による食害の時期を示している。

そしてこの図をみれば、鹿が描かれる上下の位置関係と鹿の生態、季節の推移が綺麗に対応できることを確認できる。鹿4から鹿10までの間は、鹿が夏毛を帯びる時期と一致する。鹿9の胴部下に奇妙な沈線が描かれ鹿

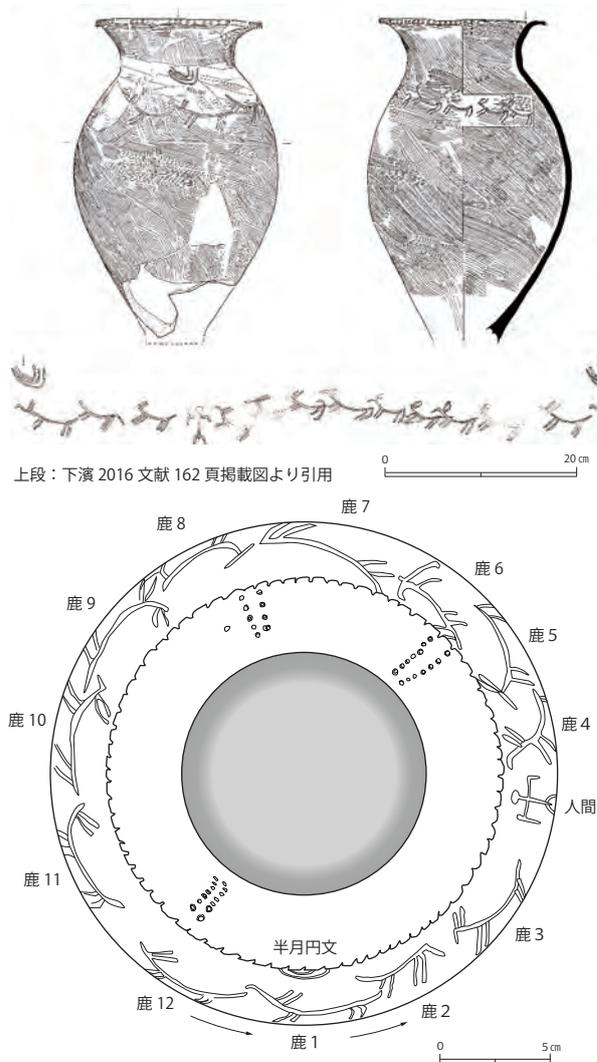


図16 石川県八日市遺跡出土鹿絵壺の概要

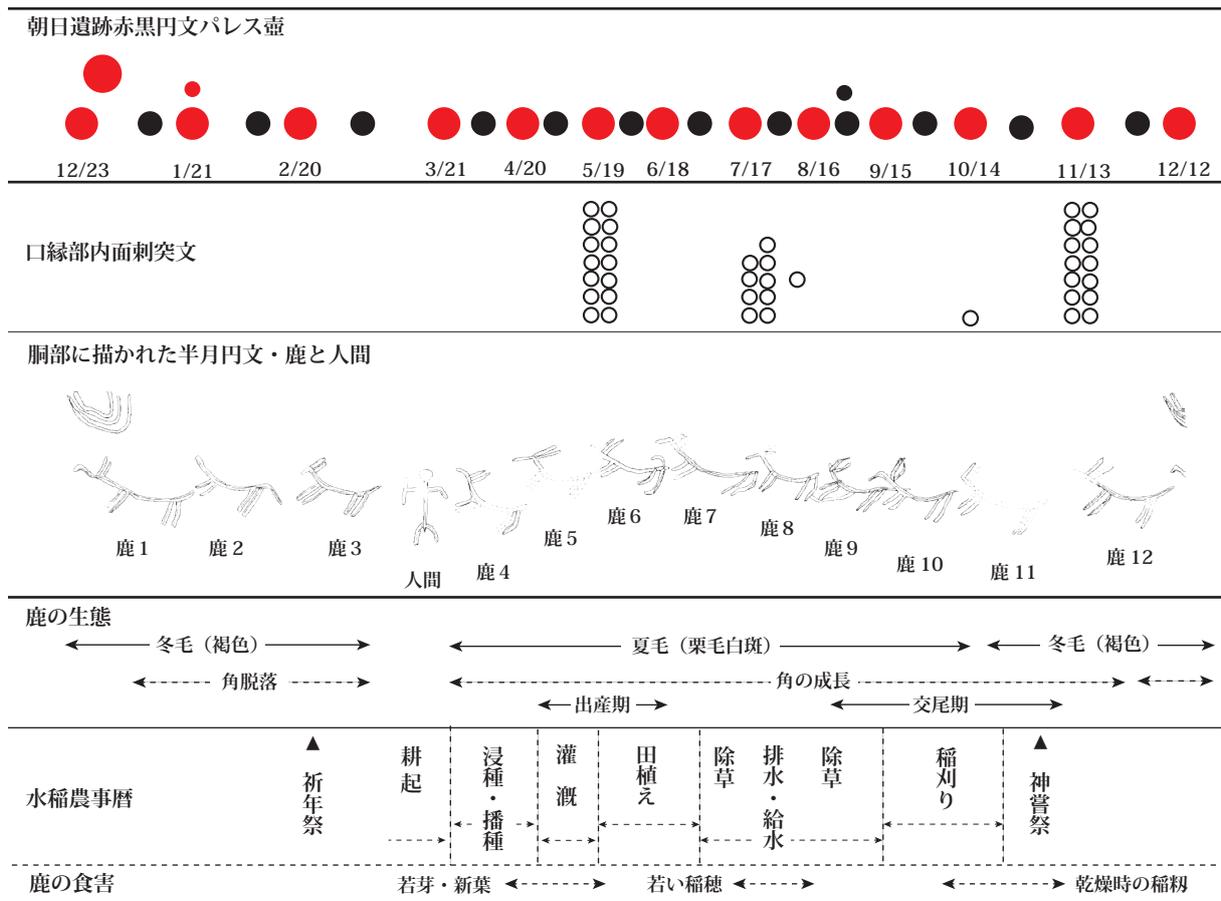


図 17 赤黒円文パレス壺と八日市地方遺跡鹿絵壺の構図比較

10とも重なっている状態は、9月から11月までの鹿の交尾期を意図した描写であろう。牡鹿角が脱落するのは冬期であるが、鹿2には角の表現がない。つまり上方の半月円文を冬至の太陽とみれば、地上の12頭の鹿絵は、その生態に則した12ヶ月間の推移を表すものとして無理なく読み解けるのである。

こうして、人間はなぜ鹿3と鹿4の中間に配されたのかという問いから始め、農事暦と鹿との対峙関係についても時系列に沿って読み解けることが判明した。この人物こそは水稲農耕の担い手であり、鹿4と鹿11が人間と同じく里の世界に描かれたのは、鹿が稲を荒らす食害期を示すもので、水稲農耕をめぐり水田を舞台として人間と鹿が直接対峙せざるをえなくなる時期を、2頭の鹿はその描かれた位置によって表したのだと解釈できる。さらに鹿6に対応する口縁部内面の14個の刺突文は、田植えの直前に地霊への犠牲として捧げられる鹿14頭を表し、鹿8に対

応するそれは、出穂期の稲と水田に捧げる犠牲9頭+1頭、鹿11に対応する1個と鹿12に対応する14個には、収穫後の地力が弱まった地霊に感謝の意を込めて、その生き血を捧げる鹿の頭数を当てたとみることが可能である(岡田1992・春成1991参照)。つまりこの鹿絵壺は、太陰暦を背景に水稲農耕における人間と鹿との対峙を時系列に沿って描くものだったと結論づけられる<sup>11)</sup>。

### (3) 弥生文化と太陰暦

濃尾平野は広大な氾濫平野で標高も低く、朝日遺跡周辺の河川水位は潮汐の影響を強く受ける。現在でも朝日遺跡の周辺を流れる河川は潮の干満の影響を受け、ときに逆流することもあると聞く。この現象は月の満ち欠けと連動して起こり、大潮は新月と満月の日のみ発生する。

こうした月相の変化に注意を払わなければ、平穏な生活など保証されない居住環境のもと、この地を選び文化を育んだのが朝日遺

跡の弥生人であった。したがってこの遺跡から太陰暦の形跡を示す壺が出土したことは、たんなる偶然ではなかった可能性が指摘できる。

また弥生後期の前葉になってこのような特殊な壺が現れた背景には、中期末から顕在化した気候の寒冷化があったと推定される。環境の急激な悪化は社会情勢の不安定化を生み、人智を超えた存在への祭祀を必然化させる。こうした環境下ゆえに赤黒円文パレス壺は現れた可能性が高い。安定した環境のもとでは描かれる必要もなかった暦が壺に描かれ、それを祭祀に供する行為を通して、人々は環境の回復を「天＝太陽と月」に向けて祈ったのではなからうか。この壺の出土地点の近隣に造営された特殊な方形周溝墓SZ132は、そうした祭祀の舞台であったと考えられる<sup>12)</sup>。

この太陰暦を満月や新月ではなく鹿で代替表現したものが八日市地方遺跡例であり、水稻農事暦と鹿による稲の食害との対応関係を表すものであった。弥生時代人の精神世界を具体的に描写する真に雄弁な暦だといえる。口縁部内面の管状刺突列は犠牲に供する鹿の頭数を表すものであった可能性も高く、朝日遺跡から多数出土する鹿の肩甲骨が卜骨に使用され、始祖霊（神）との交歓にもちいられた事実と併せて今後評価すべき重要な絵画資料である。

八日市地方遺跡は日本海沿岸航路を伝う交易の一大拠点でもあった。日本海沿岸部は潮汐の変化が少ない地帯として知られるが、河口付近の潮位の変化は船を遡上させるうえで重要な要件であったことも間違いない。この点において太陰暦は潮汐変化の予測表としても活用されたはずである。だから太陰暦を背景とする鹿絵壺がこの遺跡から出土したことにも必然性がある。

さらにこの壺は弥生中期末、八日市地方遺跡の歴史の最終場面において現れたことにも留意すべきであろう。衰退を余儀なくされた情勢下、本来あるべき姿を再確認する意図が働いた結果の産物ではなかったか。

ようするに弥生文化にとって太陰暦は必要不可欠な暦の枠組みでもあったために、中国側からの影響ではなく、日本列島に生きる

人々によって編まれた自生的な暦であった可能性は高いのである。

## おわりに

方位観と暦をめぐる課題と向き合ってきた筆者は、日本列島の先史・原史時代における暦の歴史を以上のような形で理解している。これまでの暦学では、弥生・古墳時代の人々は季節の移ろいを風向きや気温の変化、草木の繁茂や開花を通じて知覚する、いわゆる自然暦しか知らなかったであろうと漠然と考えられてきた(岡田1982・荒川2001など)。しかし水稻農耕を定着させるためには太陽暦が不可欠なので、日本列島では原初的な日の出暦をもちいることによって農事暦を組み上げたとみるのが最も蓋然性の高い解答であろう。

さらに百済から招来された暦博士によって元嘉暦が6世紀の日本列島に到来するまでの古墳時代の社会は、暦に無垢な状態であったとする従来の見解にも従えない。少なくとも3世紀の北部九州地域では、中国側の太陰太陽暦を倭人は借用した事実が認められるからである。

ただし現時点で最も重視すべきは、弥生時代の土器に太陰暦が刻まれた可能性が浮上したことである。三内丸山遺跡の建物群や吉野ヶ里遺跡北内郭の様相から想定されたことではあったが、赤黒円文パレス壺や鹿絵壺という具体的な資料が検討の俎上に乗るとなると、議論の局面は変わる。縄文時代中期以降に太陰暦の形跡をみいだせるか否か、それが今後の焦点である。

日本における考古天文学は、まだ学界が認知するまでには至らないようであるが、人間の時空間認知をふまえつつ現在の情報処理技術を活用すれば、遺跡や遺構から先史・原史時代の暦が復元できることを強調したい。もとより遺物からも無文字社会の暦を復元することは可能な段階に到達していることを付言して本稿を閉じる。

## 註

- 1) 埋葬方位は白川美冬による命名で、墳丘軸線と埋葬頭位を併せた埋葬に関わる方位の総称として提案された(白川2024a)。

- 2) 縄文文化の場合、死者の魂は後頭部から抜けることが想定された一方、擦文文化の場合はアイヌ文化と同様、死後の魂も起き上がって太陽が沈む方向へと歩みを進めるとの想定が優勢であった、という解釈も成り立つ。ちなみに琉球列島の民俗誌を紐解けば、魂の遊離は後頭部からであるとの観念があり、現在でもそのように考える向きがある。
- 3) 約 9,000 年前から現在にかけて黄道傾斜角は減少中であり、減少幅は 100 年間で約 0.02° である。
- 4) 考古学の手法によって山上他界を事実関係のうえで立証できるのは、本州中国地域や北陸地域における弥生時代後期の墓制であるが、古代中国の史書にも死者の魂は山中に向かうとする民間伝承があり、『魏志』にも泰山が死者の魂の向かう先であるとの記載がある。『古事記』に登場する「黄泉国」も山上・山中他界であることからみて、東アジア地域の全域において山上他界は普遍的であった可能性が高い（北條 2009・2017）。
- 5) 日本考古学において埋葬頭位と太陽の運行との関係への視座を遮断したのは太平洋戦争の敗戦に起因する。記紀神話を虚構とみなしアマテラスを顧みない思考への帰着である（北條 2017）。一方、戦勝国を含む欧米側では、戦後も考古天文学が着実に進展して現在に至る。その現状については後藤明が概括的に紹介している（後藤 2017）。白川美冬の学史整理にも関連した記述がある（白川 2024a）。
- 6) むしろ考古天文学的な分析結果を優先させる方が正解に近いのかもしれない。
- 7) 方位の古語および語源からの変遷については、東海大学文学部日本文学科の日本語学者、湯浅紗央氏の教示をえた。
- 8) 平気法とは 1 太陽年を 365.25 日とし、冬至を 12 月 22 日に固定し 15.22 日間隔で節気を等分に割り振る方法を指す。対する定気法とは現在の算出法で、太陽黄経がじっさいに 15° 動いた期日を観測によって求め節気を定める手法である（細井 2014 参照）。
- 9) 冬至を基準としつつも年初をどのタイミ

ングに置くかについては古代中国側でも一定しておらず、「三正論」と呼ばれる 3 タイプがあった。夏正は冬至月の翌々月を正月とする方法で、殷正は冬至月の翌月を正月とする手法、周正は冬至月を正月とする手法である。

- 10) 本節の記述は調査者の原田大六がその著書（原田 1966）のなかで大筋を解明したものであり、原田の死後実施された再調査成果をふまえつつ、筆者が再検討した結果である。
- 11) 朝日遺跡の赤黒円文壺と八日市地方遺跡の鹿絵壺との高度な相関関係については 2024 年 2 月に清須市で開催された講演会『斜め上からみたパレス壺』において概要を紹介し、詳細は白川との共著論文として『日本考古学』誌に掲載予定である（北條・白川 2025）。
- 12) 北区画の環濠内に唯一設けられた方形周溝墓 SZ132 の特異性については赤塚次郎が注目し、正確な方位については白川美冬が検証している（赤塚 2009・白川 2024b）。

#### 引用文献

- 赤塚次郎 2009『朝日遺跡Ⅷ』本文編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 154
- 赤塚次郎 2018『邪馬台国時代の東海の王 東之宮古墳（シリーズ「遺跡を学ぶ」130）』新泉社
- 荒川紘 2001『日本人の宇宙観—飛鳥から現代まで—』紀伊國屋書店
- 嵐嘉一 1975『近世稲作技術史』農山漁村文化協会
- 大島直行 2014『月と蛇と縄文人—シンボリックとレトリックで読み解く神話的世界—』寿郎社
- 岡田芳朗 1982『暦ものがたり』（角川ソフィア文庫）角川書店
- 岡田精司 1992「古代伝承の鹿—大王祭祀復元の試み—」『古代祭祀の史的研究』塙書房 417-443 頁
- 後藤明 2017『天文の考古学』同成社
- 下中弘編 1993『日本史大事典』平凡社
- 下濱貴子 2016「補足掲載する特殊土器」『八日市地方遺跡Ⅱ 第 5 部土器・土製品編 第

- 6部自然科学分析編 第7部補遺編』 303-311頁
- 白川美冬 2024a「埋葬方位研究の今とこれから」『考古学研究』70-4 62-75頁
- 白川美冬 2024b「朝日遺跡埋葬方位考」『あいち朝日遺跡ミュージアム研究紀要』3 1-20頁
- 農業出版社 1961『齊民要術選讀本』(北京)
- 都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3 17-34頁
- 都出比呂志 1986「墳墓」『岩波講座日本考古学(4) 集落と祭祀』岩波書店 218-267頁
- ネリー・ナウマン(檜枝陽一郎訳) 2005『生の緒—縄文時代の物質・精神文化—』言叢社
- 原田大六 1966『実在した神話』学生社
- 春成秀爾 1991「角のない鹿—弥生時代の農耕儀礼」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ 文献出版 442-481頁
- 福海貴子 2003「第7節 絵画土器」『八日市地方遺跡Ⅰ—小松駅東土地区画整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』第2分冊 遺物報告編 石川県小松市教育委員会 162-167頁
- 藤田三郎 2012『唐古・鍵遺跡—奈良盆地の弥生大環濠集落—』同成社
- 藤本英夫 1971『北の墓』学生社
- 北條芳隆 2009「『大和』原風景の誕生—倭王権が描く交差宇宙軸—」『死の機能—前方後円墳とは何か—』岩田書院 29-100頁
- 北條芳隆 2017『古墳の方位と太陽』同成社
- 北條芳隆 2020「三内丸山遺跡と北限の満月」『日々の考古学3(東海大学文学部考古学研究室開設40周年記念論集)』23-38頁
- 北條芳隆 2022a「纏向古墳群と周辺景観」『纏向学の最前線』纏向学研究10 185-194頁
- 北條芳隆 2022b「吉野ヶ里遺跡の祭祀と北限の満月」『モノ・コト・コトバの人類史—総合人類学の探究—(後藤明先生退職記念論文集)』雄山閣 285-299頁
- 北條芳隆・岩城邦典・白川美冬・鴨下真由 2022『吉野ヶ里遺跡の暦を考える』arc Astro-VR映像 2022年12月吉野ヶ里歴史公園にて公開(国立天文台HPからダウンロード可能)
- 北條芳隆 2024a「稲作暦と稲束からみた古墳時代の成立過程—景観史と経済史の視点から—」『島根考古学会誌』41 1-12頁
- 北條芳隆 2024b「二至と二分を重視した弥生時代の日の出暦」『物質文化』104 1-16頁
- 北條芳隆・白川美冬 2025「弥生文化の暦を表した可能性のある壺」『日本考古学』(掲載決定)
- 細井浩志 2014『日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門』吉川弘文館
- 藪内清 1949『中国の天文学』恒星社厚生閣・2018『藪内清著作集(第3巻)』再掲 臨川書店 83-199頁
- 藪内清 1969原著・2017復刻『(定本)中国の天文暦法』(『藪内清著作集(第1巻)』再掲) 臨川書店

あいち朝日遺跡ミュージアム  
研究紀要  
第4号  
2025年3月31日 発行

---

編集・発行／あいち朝日遺跡ミュージアム  
〒452-0932 愛知県清須市朝日貝塚1番地  
TEL 052-409-1467



**AICHI ASAHI  
SITE MUSEUM**  
あいち朝日遺跡ミュージアム